

[レビュー・アーティクル]

金融史研究におけるアムステルダム銀行の位置

橋 本 理 博

帝塚山大学経済学部

要 旨

本稿の目的は、アムステルダム銀行に関する先行諸研究を整理し、金融史研究における同行の現在の位置を確認することである。かつて、アムステルダム銀行は「古い金融技術の終着点」や「伝統への回帰」などと形容され、イングランド銀行のような中央銀行ではないと考えられてきた。ところが、こうした考えとは異なる角度からアムステルダム銀行を捉える研究により、同行が二つの計算貨幣の創出と預金受領証の導入というイノベーションを通じて、国際的には安定した通貨を供給しつつオランダ経済と国際経済とを遮断することを可能にし、国内的には公開市場操作を通じて通貨価値の安定性を実現させたという姿が明らかにされている。この姿から、アムステルダム銀行は「基軸通貨」バンク・フローリンを供給する「世界の銀行」として、また「汎ヨーロッパ多角的決済システム」の中核として、そして「最初の中央銀行」として位置づけられている。

キーワード：アムステルダム銀行、多角的決済システム、基軸通貨、中央銀行

The position of the Bank of Amsterdam in the study of monetary history

Masahiro HASHIMOTO

Faculty of Economics
Tezukayama University

発行日 2018年10月31日

1. はじめに

アムステルダム銀行が設立された1609年から400年経った2009年、同行を様々な角度から検討した論稿が収められたファン・ニーウケルク編『アムステルダム銀行』が公刊された。これにはオランダ語版 (*de Wisselbank*) と英語版 (*the Bank of Amsterdam*) とがあり、両者の内容は異ならないものの付された副題は異なっている。前者は『都市の銀行から世界の銀行へ (*van stadsbank tot bank van de wereld*)』、後者は『中央銀行業の起源 (*on the origins of central banking*)』である。かつてアムステルダム銀行は「古い金融技術の終着点」「伝統への回帰」と形容され¹⁾、イングランド銀行のような「中央銀行」ではないと考えられてきた。この二つの副題は、金融史研究におけるアムステルダム銀行の位置づけが大きく変容していることを言い表している。本稿の目的は、この変容のあり方を整理し、アムステルダム銀行の研究史における現在地を確認することである。

アムステルダム銀行が閉鎖された19世紀初頭以降、同行の研究でパイオニア的存在となったのがメース (W. C. Mees) である。メースは、アムステルダム銀行が市場に介入して「バンク・マネー (*bank geld*)」を意図的に売買し、為替レートの変動幅を和らげ、金銀の輸出を抑えることで同行における金属準備の水準を維持したという。彼自身は明言していないが、銀行が市場に介入してマクロ経済変数をコントロールするという行動は近代の中央銀行に近い。だが、メース以降、こうした同行の「近代的」性格に光が当てられることはなかった。20世紀に入り、その後のアムステルダム銀行研究の礎を築いたのはファン・ディレン (J. G. van Dillen) である。彼によって編纂された2巻組の *Bronnen tot de geschiedenis der Wisselbanken* には、議会における貨幣・銀行制度に関する決議の内容、アムステルダム銀行の貸借対照表や損益計算書、それに正貨保管庫の内容等のデータが収録されており、その後の研究の基礎資料となった。アムステルダム銀行に関する多くの研究が、メースやファン・ディレンによって築かれた基礎の上に積み重ねられていく²⁾。

2. 中世の銀行業

デ・ローヴァー (R. de Roover) によれば、「前近代の銀行業を近代の銀行業から区別するものは、譲渡性があり割り引かれうる手形が存在していなかった点にある³⁾」という。アムステルダム銀行は手形割引を行わなかったため、この視点からは、同行を含む公立預金銀行は中世の銀行

1) van der Wee (1977) pp. 346-347.

2) van de Laar (1978) では、Mees (1838) での議論がより精緻化されている。また、ファン・ディレン以来、アムステルダム銀行の設立動機は造幣所間競争による硬貨流通の不安定性にあると考えられてきたが、Polak (1998) ではオランダの硬貨生産の研究を通じて、市当局が国際的な商人共同体のために安定した支払環境を確立することが目的であったことが指摘されている。

3) de Roover (1953) p. 119, 楊枝訳 (2011a) 145頁。

業と位置づけられる。

手形割引とは、額面に記載された金額から一定額を値引いて手形を買い取ることである。買い取った者は、手形の振出人（原債務者）から債務の履行を受けることで、割引分を手にできる。つまり、手形割引とは貸付行為であり、割引率は利子率に相当する。割引が行われるには、手形の第三者への譲渡が容認されていることが前提であるが、中世ヨーロッパでは手形を譲渡するという慣行が未成立であり、したがって割引も未確立であった。カトリック教会の教義が利子の徴収を禁じていたからである。とはいえ、利子が徴収されなかったわけではない。商人たちは、都市間で異なる外為相場を利用して「戻し為替」を組むことで、為替取引に利子を紛れ込ませることができた⁴⁾。もっとも、「戻し為替」を利用した利子の取得は資金を回収する際の為替相場にかかっているため、投機的要素が含まれることになる。これに対して、手形割引は貸し手に確定した利益をもたらす。外国為替取引を利用した利子徴収の投機的要素こそ、「中世」の要素の一つと考えられたのである⁵⁾。

デ・ローヴァーによれば、17世紀イングランドの銀行制度は商業手形の割引に立脚していた。彼は、この制度を「内国銀行業（domestic banking）」と呼び、外国為替取引に立脚する「外国銀行業（foreign banking）」との対比から、前者の卓越性を強調する⁶⁾。他方「公立銀行はすべて預金振替銀行であって、（…）それらは伝統に従って、中世の両替業者と同じ機能を遂行していたのである。それゆえ、それらの中で最も有名な銀行がアムステルダム銀行と呼ばれるのはまさに至当である」という⁷⁾。そして、これら公立銀行が割引業務を行っていないことを強調したうえで、「為替手形に譲渡性があり、割引かれる証券へ転換したことは、ヨーロッパ銀行制度の本質的構造の根本的な変化を引き起こした⁸⁾」と主張するのである。

手形裏書と手形割引の軌範が形成されることが近代的制度への転換点であるという視点は、アントウェルペンの金融構造を検討したファン・デア・ウェー（H. van der Wee）も同様である。彼が、アムステルダム銀行を指して「13世紀イタリア以来続く古い金融技術の進展の終着点⁹⁾」と評したのも、16世紀にはアントウェルペンで手形の裏書や割引という「近代的」技術が確立していたのに、それにも関わらずその革新に背を向けてアムステルダムがなぜイタリア起源の「保守的」技術に回帰したのかという疑問を投げかけたのも¹⁰⁾、手形流通性の確立に「近代」の始点のみて

4) 大黒（2006）も参照。

5) de Roover（1953）p. 144, 楊枝訳（2011b）67頁。

6) de Roover（1953）pp. 139-140, 楊枝訳（2011a）170-171頁。

7) de Roover（1953）p. 136, 楊枝訳（2011a）168頁。

8) de Roover（1953）p. 141, 楊枝訳（2011a）172頁。

9) van der Wee（1977）p. 346.

10) van der Wee（1977）p. 347. この認識に対して、ド・フリース（J. de Vries）とファン・デア・ワウデ（A. van der Woude）は、アムステルダムでは国内取引に利用される約束手形を発行したり割引業務を行ったりする出納業者と外国為替手形に特化するアムステルダム銀行という一種の分業関係がみられ、振替銀行の設立によって出納業者の「革新」が中断されることはなかったと「事実との若干の相違」を指摘する。de Vries and van der Woude（1997）p. 132, 大西・杉浦訳（2009）120頁。

いたからである。

さらに、国際金融と国内銀行業務とを対立的に捉え、手形割引業務の導入が「近代的」銀行業の始点とみなす理解は、大塚久雄にも共通する。大塚は、「前貸」（商人→生産者への信用供与）が生産者を商人へ金融的に従属させるのに対し、「商業手形の発行」（生産者→商人への信用供与）は、生産者をその従属から解放すると考え、この転換を「近代的」商業信用の生成として重要視した。大塚が「オランダのアムステルダム銀行の振替業務と比較してみるだけでも明らかであるように、手形割引は実際設立当初からイングランド銀行の一つのきわだった特徴」¹¹⁾というのも、振替業務と手形割引を対比し、後者に銀行業務の近代性を見たからである。また、石坂昭雄が17・18世紀のアムステルダム金融市場の構造について綿密な分析を行った目的も、フランス革命以降に大陸ヨーロッパで「発券銀行を頂点とする近代的信用制度」が創出・形成される過程で「外国貿易や国際金融取引に依拠する前期的金融業」が各国の資本主義経済にどのように「変形されて存続していったか」を解明することであった。その中で、アムステルダム銀行は「安定したグルデン貨幣の存在と、この決済の便は、アムステルダムに為替業務を集中することに大きく寄与した」と評される一方、この銀行の国内取引への利用が限定的であった点も強調されている¹²⁾。

これらは、銀行業務の内容をもって「近代的銀行」を定義し、そこへの接近でもって歴史的意義を評価するものである¹³⁾。その内容こそ国内銀行業務としての手形割引と発券であった。したがって、手形割引業務に関与せず発券も行わなかったと考えられたアムステルダム銀行は「近代」の壁を乗り越えなかった中世の銀行業として位置づけられるわけである¹⁴⁾。

3. 多角的決済システムの中心

スパーリング (J. Sperling) によれば、ヨーロッパの国際決済は17世紀後半に双務主義から多角主義へと移行し、ヨーロッパ中心型の決済システムが形成されたという¹⁵⁾。この指摘は、重商主義論争の中から生まれたものであるが、その決済システムの中にアムステルダム銀行を位置づ

また、ファン・デア・ウェーは、アムステルダム銀行の決済機関としての役割は17世紀末までであるとし、それ以降は貴金属取引に業務の比重を移していったという (van der Wee, 1977, pp. 346-347)。もっとも、17世紀末以降、アムステルダム銀行による貴金属取引が拡大するのはそのとおりだとしても、決して決済機関としての比重が下がったわけではなかった。中谷 (2006) によればアムステルダム銀行の決済機関としての役割は同行以外の金融業者が成長してくる17世紀末葉以降のことだという。

11) 大塚 (1966) 372頁。

12) 石坂 (1971) 73頁, 106-107頁。

13) この指摘は田中 (2017) 71頁を参考にした。

14) 「近代的」信用制度の確立によって達成されるはずの低利が、その確立をみぬオランダでなぜ実現されたのか。低利の要因をアムステルダム銀行に求めるか否かをめぐって論争が展開された。その論争については、渡辺 (1964), 田中 (1966), 石坂 (1971), 徳永 (1976), 宮田 (1987) を参照。

15) Sperling (1962) p. 450. この指摘は「ウィルソン＝ヘクシャー論争」から生まれた。Wilson (1949), (1951), Heckscher (1950) を参照。

けてみると、同行が国際な支払関係を結ぶ中心的な役割を果たしていたという姿が浮かび上がる。

17～18世紀において、バルチック地域、中東や東方など、ヨーロッパとの取引関係が構造的に非対称で国際収支赤字である場合にはその支払いに貴金属が輸出された。ところが、17世紀末のイギリスの貴金属輸出は、(東インドを除く)貿易収支赤字地域へは少なく、貿易収支黒字地域である西ヨーロッパに多かった。つまり、貴金属輸出と貿易収支赤字地域との間に相関がみられなかったのである。この事態はすなわち、イギリスがバルチック地域等からの輸入代金を、アムステルダムやハンブルク宛の為替手形で決済する構造が機能していたことを意味する¹⁶⁾。

楊枝嗣朗は「オランダ・アムステルダムは(…)、銀本位の“hard currency”地域への貴金属、主に銀の輸出の多くを引き受けることで、貴金属市場と外国為替市場に立脚するアムステルダム国際市場を中心とした汎ヨーロッパ多角的決済システムの頂点に君臨¹⁷⁾し、その中心にアムステルダム銀行が位置したと評価する。そして、手形の流通性の確立が「内国銀業」すなわち近代的銀行業を生み出したとする認識に異を唱える。イングランドでは17世紀前半、まず「外国」為替手形において振出根拠が為替契約から引受信用に進み、裏書や割引も「外国」為替手形から始まった。支払人によって提供される引受信用によって、為替手形は為替金融契約にとらわれることなく振り出されるようになる。17世紀におけるイングランドの信用構造は、ロンドン商人による「商業信用」ではなくオランダ商人による「引受信用」に立脚していた。楊枝は、アムステルダムを中心とする国際的な決済・信用機構へのロンドン参入に、近代初期イギリスにおける「金融革命」の核心をみる¹⁸⁾。

また、名城邦夫は、アムステルダム銀行の出現によって、単一の計算貨幣によってヨーロッパ全体の市場統合が実現された点を評価する¹⁹⁾。ヨーロッパ各地に形成された貨幣システムの計算体系を前提として、それらを商人たちは必要の範囲で関連づけ、必要な価値尺度の統合が図られ、さらには貨幣金融システムが統合されていったという。その一つの到達点があムステルダム銀行である。「アムステルダム振替預金銀行の意義は膨大な商業・金融取引の全ヨーロッパ規模での運用と決済を集中させ多角的支払・決済システムとして統合したことにより、アムステルダム銀行宛為替手形により決済が完成し、支払差額の無現金決済が達成され、貨幣流通速度は顕著に加速し、全ヨーロッパ大の国際収支が合理的で柔軟な均衡を達成することになった²⁰⁾。

さらに、田中英明は、アムステルダム商人によって引き受けられた為替手形が裏書や割引によって流通し、最終的にはアムステルダム銀行で決済される機構の形成を重視する。アムステルダムを中心とした決済・信用機構は、アムステルダム銀行のみならず「引受商会」と呼ばれた商人たちを核としており、その「両者がどのような形で結びついていたのかという観点²¹⁾が、ロンド

16) Sperling (1962), 楊枝 (2004) を参照。

17) 楊枝 (2004) 70頁。

18) 楊枝 (2004) 1-11頁。なお、引受信用についてはRogers (1995) を参照。

19) 名城 (2006), (2008), (2011) を参照。

20) 名城 (2008) 66頁。

21) 田中 (2017) 71頁。

ンを中心とした近代イギリスの決済・信用機構の理解には不可欠であるとし、「アムステルダム振替銀行や市中の金融機関が、手形割引を基礎とした発券銀行といった形態をとらなかったことのみで、『伝統への回帰』云々を議論することは早計」²²⁾だと指摘する。

これらは、銀行業務の内容というより、為替手形の振出しや支払関係など、為替業務を遂行する「商人＝銀行家(merchant banker)」の役割までも含めたシステム総体のあり方を重視している。アムステルダムの商人＝銀行家によって供与される引受信用により、商品がオランダを経由しない貿易取引でもアムステルダム宛為替手形が振り出される。そして、最終的にその手形が決済されるアムステルダム銀行は、汎ヨーロッパ多角的決済システムの中心として位置づけられるのである。

4. 基軸通貨としてのバンク・フローリン

ジラルール(L. Gillard)によれば、アムステルダム銀行の計算貨幣バンク・フローリンはヨーロッパの「基軸通貨」として機能し、同行は「世界の銀行」「世界の手形交換所」としての役割を果たした²³⁾。そして、17世紀後半以降、アムステルダム銀行の存在によってオランダ経済は国際な経済変動の影響を免れることができたという。それを可能にしたのが、アムステルダム銀行によってもたらされた二つのイノベーション、すなわち「アジオ(agio)」と「預金受領証(receipt)」である²⁴⁾。

アムステルダム銀行が設立されたことで、オランダにはアムステルダム銀行で用いられる計算貨幣(バンク・フローリン)と、銀行外部で用いられる計算貨幣(カレント・フローリン)とが異なるという貨幣制度が創出された²⁵⁾。すなわち、同じ種類の硬貨に対する評価額が銀行の内外で異なるということである。アジオとは、バンク・フローリンとカレント・フローリンの差である。例えば、代表的な貿易用硬貨のリクスダラー(rijksdaalder)1単位に対して、同行が適用する価格は2.4バンク・フローリン、外部で適用される価格は2.5カレント・フローリンで、このときアジオは約4%となる²⁶⁾。

22) 田中(2017)57頁。

23) Gillard(2004)p.377.その題名にもあるとおり、ジラルールはバンク・フローリンを「ユーロ・フローリン(florin européen)」と呼びその基軸性を表現する。これは各種データの統計分析により導き出された指摘であるが、そのアイディアの源泉はメースにある。

24) こうしたアムステルダム銀行のシステムが十全に機能したのは、1683～1782年までの100年間であるという。Gillard(2004)pp.381-383.

25) これは同行の設立時に意図されたことではなく、流入する外国製硬貨への対処に当局が苦悶する過程で生み出されたものであった。そもそも、アムステルダム銀行に課せられた使命の一つは、輸出用硬貨を政府が布告する価格どおりに供給することであった。同行の設立前後、輸出用硬貨の市場価格の変動に政府当局は公定価格を追随させる布告を出していた。だが、紆余曲折を経て、絶えず生じる価格差を当局は1638年には事実上容認、1659年には公認するに至る。

26) なお、アムステルダムで支払われる一定額以上の額面を持つ為替手形はアムステルダム銀行で決済す

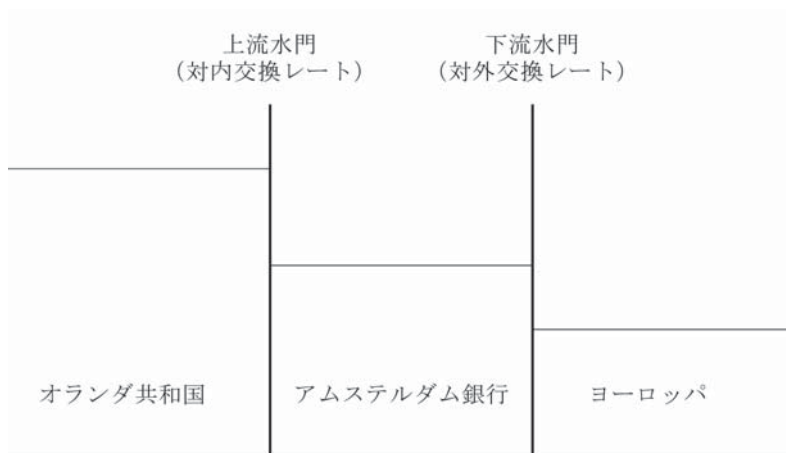
アムステルダム銀行は預金残高の現金化に手数料を徴収していたので、残高と引き替えに貿易用硬貨を入手するより銀行外部で入手するほうが低コストだった。そこで、アムステルダム銀行が入居する市庁舎の前にあるダム広場では、同行に口座を持ち自身も顧客の預金を取り扱う「出納業者 (kassier)」が事務所を構え、銀行残高と引き替えに硬貨の入手を望む者と、硬貨と引き替えに銀行残高の入手を望む者との間での取引を媒介するようになった。その際の交換比率を示したのがアジオであり、市場における硬貨の多寡によって変動した。

また、受領証は1683年に正式導入された。硬貨を預託した者に発行され、譲渡が可能であり、保有者に対してのみ預金された際の評価額を支払うことで硬貨を引出せる権利が与えられた。受領証は、固定価格でアムステルダム銀行から硬貨を入手できる「オプション」としての性格を有すると見られている²⁷⁾。この受領証が導入されて間もなく、受領証を呈示すること以外での硬貨の引出権が停止される。これにより、バンク・フローリンは、実物の硬貨でもなければ特定の硬貨の価格を示すものでもない、銀行残高としてのみ存在する計算貨幣になった。

ジラールは、アジオ (バンク・フローリンとカレント・フローリンの交換比率) の変動と、外為レート (バンク・フローリンと外国通貨との交換比率) の変動を調整することで、アムステルダム銀行は世界経済変動の影響からオランダ国内経済を遮断する役割を果たしたとする²⁸⁾。彼はその機能を「水流モデル (modèle hydraulique)」として説明し、それを概念図化したものが、図1である。

このモデルは、アムステルダム銀行の働き、アジオと為替レートの動き、そして硬貨の流れ

図1 水流モデル



(出所) Gillard (2009) p. 115.

べきことが強制されていたので、この区別により、為替手形の額面は「バンク・フローリン」で表示され、外為相場もバンク・フローリンで建てられるようになった。

27) Gillard (2004) の他, Quinn and Roberds (2009), Willemsen (2009) でも同様の評価がされている。

28) Gillard (2004) p. 377.

を、上下することで区画内の水量を調整する「水門」の仕組みになぞらえている²⁹⁾。硬貨が水量、上流の水門がアジオ、下流の水門が外為レート、アムステルダム銀行の正貨保管庫 (specie kamer) に保管されている硬貨が閘門となる。アジオが上昇すれば、預金が割高になるのでアムステルダム銀行への硬貨流入が弱まり、下落すれば預金が割安となるので硬貨流入が強まる。他方、国際収支の動向により、外為レートが上昇すればアムステルダム銀行から硬貨が流出しづらくなり、逆に下落すれば硬貨流出しやすくなる³⁰⁾。ジラールによれば、この二つの水門は同時に操作することはできない³¹⁾。つまり、外為レートの悪化や改善は、アジオの悪化や改善と同調せず、外為レートの変動は国内の貨幣流通に影響を与えない、ということである。さもなければ、硬貨の流入が国内経済に直接的な影響を受けてしまう。アジオが外国からのインフレ・デフレ圧力からオランダを防御する役目を果たし、アムステルダム銀行の正貨保管庫にある硬貨は、国際経済と国内経済を遮断するバッファとしての役割を果たした。

受領証の導入以降、アムステルダム銀行では受領証なしでの残高の現金化ができなくなり、オランダに持ち込まれる硬貨の多くはアムステルダム銀行に預託された。預託された際の評価額で硬貨を引き出す権利をその所有者に与える受領証は、輸出用硬貨を固定価格で、金属市場の変動を避けて入手することを可能にする。「預金受領証の存在が、バンク・フローリンの安定性とヨーロッパの支払システムにおける基準通貨としての地位を大きく拡大させたことは明確である。しかしそれは、商人コミュニティや出納業者、それに銀行家の信頼性に依存していた」³²⁾ というように、アムステルダム銀行のみならず、そこに口座を置いて活動する主体の役割も重要視するのである。

こうした認識は、二つの計算貨幣が併存するという独特の貨幣システムによって可能となった、バンク・フローリンの安定性の実現を重要視している。この安定性により、バンク・フローリンはヨーロッパの「基軸通貨」となり、それを供給するアムステルダム銀行は「世界の銀行」と位置づけられるわけである。

5. 最初の中央銀行

クイン (S. Quinn) とロバーズ (W. Roberds) によれば、「近代の中央銀行とは異なり、アムステルダム銀行は銀行券を発行せず、政府債を購入せず、割引窓口も操業しなかった。しかし、近

29) ニール (L. Neal) は、ジラール以前にアジオの動きを「水門」に例えている。「水門のようなアジオの変動は、アムステルダム銀行に国外者が輸出のための外国製硬貨に対するさらなる需要がありうるであろうその時でも、対内取引に用いられる国内硬貨を流通に維持することを可能にした」。Neal (2000) p. 122.

30) アムステルダム銀行の採用した通貨政策が外国為替レートの安定に有効なものであったことは、Dehing (2012) でも明らかにされている。

31) Gillard (2009) p. 115.

32) Gillard (2009) p. 119.

代の中央銀行のように、口座残高の移転を通じて取引を決済し、それに公開市場で資産を購入するためにそれを使うことで残高の価値を維持した³³⁾という。彼らはアムステルダム銀行を「最初の中央銀行 (the first central bank)」、そして同行のバンク・マネーを「フィアット・マネー (fiat money) の起源」と位置づける。公開市場を通じてその価値が維持される計算貨幣が創出されたことは、17世紀のオランダで生じたイノベーションであるという。

アムステルダム銀行は設立当初から「中央銀行」として機能していたわけではない。1609年の設立後およそ70年をかけて、アムステルダム銀行は「中央銀行化」していき、同行の預金は「フィアット・マネー」へと変貌を遂げていく。その足取りを、クインとロバーズは次のように整理する。

17世紀初頭オランダは、硬貨の品質や価格を不安定にする、硬貨の「価値低下 (debasement)」という問題に悩まされた。その対策として、政府が硬貨の価格を統制したり、硬貨の品質を保証するためアムステルダム銀行を設立したりしたのである。だが、それでは問題の直接的な解決に繋がらず、その解決は流通する硬貨からアムステルダム銀行を切り離す、すなわち銀行内外における硬貨の価格のミスマッチを容認することで実現された。これによりアムステルダム銀行と流通する硬貨との関係を仲介する市場が発展し、銀行預金と流通硬貨とが取引されるようになった。彼らは、この市場を「中央銀行資金を取引する初の公開市場 (open market)」と呼ぶ。さらに、1683年に受領証が導入されると、間もなく受領証なしでの引出権が失われた。ここから、アムステルダム銀行は、預金残高に対して受領証を購入するという手段で「公開市場操作」を行うようになり、バンク・フローリンの価値を維持させえたという。そして、1659年以降の約100年間、国内物価水準の安定も実現されることになった³⁴⁾。

また、彼らはアムステルダム銀行のバランスシートを再現するという手法によって、バンク・マネーがフィアット化した後の政策を分析している。受領証の導入によって、口座残高の所有権と、硬貨で預金残高を現金化するという選択肢が「分離」し、請求権のある残高と請求権のない残高という二重構造が生まれた。請求権のある残高は100%準備のある「ナローバンク」となり、ない残高は公開市場操作や貸付をファイナンスするのに用いられるようになる。彼らは、1683年以降もアムステルダム銀行の安定した価値の計算貨幣を維持するという政策目標に変わりはないものの、フィアット化が、オランダ東インド会社に対する貸付、アムステルダム市に対する貸付、マネー・ストック調整のスムーズ化といった活動を精力的に追求することを可能にしたと指摘する³⁵⁾。

かつて、中央銀行の業務として発券 (の独占) や (再) 割引が重要視された。このため、アムステルダム銀行は近現代的な中央銀行ではないと目されたのである。しかし、地域によっては中

33) Quinn and Roberds (2007) p. 265. もっとも、リスト (C. Rist) によれば、ジョン・ロー (J. Law) やリチャード・カンティロン (R. Cantillon) といった18世紀の学者たちは、記名式受取証と銀行券との間に区別を設けていなかった、と指摘している。とすれば、アムステルダム銀行は実質的に「銀行券」を発行していたと捉えることもできる。Rist (1966) p. 72.

34) Quinn and Roberds (2007) を参照。

35) Quinn and Roberds (2014) を参照。

中央銀行が発券を独占していないケースがあったり、振り返れば中央銀行が割引率操作をした期間は限られていたり、地域や時代により中央銀行が果たす役割は異なっている。今日に目を向けると、中央銀行は巨額の資金決済を行うシステムを運営し、それを効率的に行う前提として預金価値を維持させるという使命を担っている。中央銀行の働きやそれに対する認識が変化する中で、アムステルダム銀行が果たした中央銀行的な役割に光が当てられるようになったといえよう。

6. おわりに

アムステルダム銀行は、近現代における中央銀行を特徴づける業務とされる手形割引や発券を「行わなかった」という点が強調されていた。また、国際通貨として19世紀イギリスのポンド・スターリングや20世紀アメリカのドルが語られても、18世紀以前について語られることは殆どなかった。

しかし、諸研究によって、同行が国際的には安定した通貨を供給しつつオランダ国内経済と国際経済を遮断することを可能にし、国内的には公開市場操作を通じて通貨価値の安定性を実現させたことが明らかにされている。かつて中世の銀行業と位置づけられたアムステルダム銀行は、「基軸通貨」バンク・フローリンを供給する「世界の銀行」として、「汎ヨーロッパ多角的決済システム」の中心として、そして「最初の中央銀行」として位置づけられている。こうした研究状況を踏まえ、今後、同行の意義を含め中央銀行制度史や国際金融史が再構成されていく必要があるだろう。

参考文献

- Dehing, P. and M. 't Hart (1997) "Linking the fortunes: currency and banking, 1550-1800," M. 't Hart, J. Jonker and J. L. van Zanden eds. *A financial history of the Netherlands*, Cambridge.
- Dehing, P. (2012) *Geld in Amsterdam: Wisselbank en wisselkoersen 1650-1725*, Hilversum.
- Dillen, J. G. van (1921) "Een boek van Phoonsen over de Amsterdamsche Wisselbank," *Economisch-historisch jaarboek*, deel. 7, 's-Gravenhage.
- (1922) "De beurscrisis te Amsterdam in 1763," *Tijdschrift voor geschiedenis*, 37.
- (1923) "Amsterdam als wereldmarkt der edele metalen in de 17^{de} en 18^{de} eeuw," *De Economist*, 's-Gravenhage.
- (1925) *Bronnen tot de geschiedenis der Wisselbanken: Amsterdam, Middelburg, Delft, Rotterdam*, 's-Gravenhage.
- (1964) "The Bank of Amsterdam," J. G. van Dillen ed. *History of the principal public banks*, 2nd edition, London (1st edition in 1934, the Hague).
- Gillard, L. (2004) *La Banque d'Amsterdam et le florin européen au temps de la République néerlandaise (1610-1820)*, Paris.
- (2009) "The international role of the Bank of Amsterdam," M. van Nieuwkerk ed. *the Bank of Amsterdam: on the origins of central banking*, Amsterdam.

- Hecsher, E. (1950) "Multilateralism, Baltic trade and the mercantilists," *The Economic History Review*, New series, Vol. 3. No. 2, pp. 219–228.
- Jong-Keesing, E. E. de (1939) *De economische crisis van 1763 te Amsterdam*, Amsterdam.
- Jonker, J. (2005) "Lucien Gillard, La Banque d'Amsterdam et la florin européen," *Histoire & mesure*, XX-3/4, pp. 2–5.
- Korthals Altes, W. L. (1999) "Valuta in de wissel van de tijd," *Spiegel historiael*, 34, juli/augustus, pp. 334–343.
— (2001) *De geschiedenis van de gulden: van pond Hollands tot euro*, Amsterdam.
- Laar, H. J. M. van de (1978) *Opperbankier en wetenschapman: Willem Cornelis Mees 1813–1884*, 's-Gravenhage.
- McCusker, J. (1978) *Money and exchange in Europe and America 1600–1775: a handbook*, London.
- Mees, W. C. (1838) *Proeve eener geschiedenis van het bankwezen in Nederland gedurende den tijd der Republiek*, Rotterdam.
- Neal, L. (2000) "How it all began: the monetary and financial architecture of Europe during the first global capital markets, 1648–1815," *Financial History Review*, No. 7, Vol. 2, pp. 117–140.
- Nieuwkerk, M. van ed. (2009) *the Bank of Amsterdam: on the origins of central banking*, Amsterdam. (Nieuwkerk, M. van ed. (2009) *de Wisselbank: van stadsbank tot bank van de wereld*, Amsterdam.)
- Polak, M. S. (1998) *Historiografie van de 'muntchaos': de muntproductie van de Republiek, 1606–1795*, Amsterdam.
- Quinn, S. (1996) "Gold, silver, and the Glorious Revolution: arbitrage between bills of exchange and bullion," *The Economic History Review*, New series, Vol. 49, No. 3, pp. 473–490.
- Quinn, S. and W. Roberds (2005) "The big problem of large bills: the Bank of Amsterdam and the origins of central banking," *Federal Reserve Bank of Atlanta, working paper series*, 2005–16.
— (2007) "The Bank of Amsterdam and the leap to central bank money," *The American Economic Review*, Vol. 97, No. 2, pp. 262–265.
— (2009) "An economic explanation of the early Bank of Amsterdam, debasement, bills of exchange and the emergence of the first central bank," J. Atack and L. Neal eds. *The origins and development of financial markets and institutions: from the seventeenth century to the present*, Cambridge.
— (2014) "How Amsterdam got fiat money," *Journal of Monetary Economics*, 66, pp. 1–12.
- Rist, C. translated by J. Degras (1966) *History of monetary and credit theory from John Law to the present day*, Yew York.
- Rogers, J. S. (1995) *The early history of the law of bills and notes: a study of the origins of Anglo-American commercial law*, Cambridge. (川分圭子訳 (2011) 『イギリスにおける商事法の発展——手形が紙幣となるまで』弘文堂。)
- Roover, R. de (1953) *L'évolution de la lettre de change XIV^e–XVIII^e siècles*, Paris. (楊枝嗣朗訳 (1986) 「為替手形発達史—14世紀～18世紀—(1)」『佐賀大学経済論集』第19巻第1号, 105–156頁。同(2009a)「R. デ・ローヴァー『為替手形発達史—14世紀～18世紀—1953年(2)」第42巻第2号, 29–63頁。同(2009b)「R. デ・ローヴァー『為替手形発達史—14世紀～18世紀—1953年(3)」第42巻第4号, 117–143頁。同(2010a)「R. デ・ローヴァー『為替手形発達史—14世紀～18世紀—1953年(4)」第42巻第6号, 83–108頁。同(2010b)「R. デ・ローヴァー『為替手形発達史—14世紀～18世紀—1953年(5)」第43巻第1号, 73–100頁。同(2011a)「R. デ・ローヴァー『為替手形発達史—14世紀～18世紀—(6)」『佐賀大学経済論集』第43巻第6号, 143–176頁。同(2011b)「R. デ・ローヴァー『為替手形発達史—14世紀～18世紀—(7)」『佐賀大学経済論集』第44巻第1号, 63–92頁。)

- Schnabel, I. and H. S. Shin (2004) "Liquidity and contagion: the crisis of 1763," *Journal of the European Economic Association*, Vol. 2, No. 6, pp. 929-968.
- Sperling, J. (1962) "The international payments mechanism in the seventeenth and eighteenth centuries," *The Economic History Review*, New series, Vol. 14, No. 3, pp. 446-468.
- Usher, A. P. (1934) "The origins of banking: the primitive bank of deposit, 1200-1600," *The Economic History Review*, Vol. 4, No. 4, pp. 399-428.
- (1943) *The early history of deposit banking in Mediterranean Europe*, volume I, New York.
- Vries, J. de (1976) *The economy of Europe in an age of crisis: 1600-1750*, Cambridge.
- Vries, J. de and A. van der Woude (1997) *The first modern economy: success, failure, and perseverance of the Dutch economy, 1500-1815*, Cambridge and New York. (大西吉之・杉浦未樹訳 (2009)『最初の近代経済——オランダ経済の成功・失敗と持続力1500-1815』名古屋大学出版会。)
- Wee, H. van der (1977) "Monetary, credit and banking systems," E. E. Rich and C. H. Wilson eds. *The Cambridge economic history of Europe V*, Cambridge.
- Willemsen, R. (2009) "The activities of the Bank of Amsterdam," M. van Nieuwkerk ed. *the Bank of Amsterdam: on the origins of central banking*, Amsterdam.
- Wilson, C. H. (1949) "Treasure and trade balance: the mercantilist problem," *The Economic History Review*, New series, Vol. 2. No. 2, pp. 152-161.
- (1951) "Treasure and trade balance: further evidence," *The Economic History Review*, New series, Vol. 4. No. 2, pp. 231-242.
- 大塚久雄 (1969a) 「信用関係の展開」, 『大塚久雄著作集 (第5巻)』岩波書店, 所収 (初版: 大塚久雄編『資本主義の成立』河出書房, 1953年, 所収)。
- (1969b) 「〔書評〕 ファン・ディレン編『公立銀行史, 付録・銀行史に関する文献』」, 『大塚久雄著作集 (第5巻)』岩波書店, 所収。
- 石坂昭雄 (1971) 『オランダ型貿易国家の経済構造』未来社。
- 大黒俊二 (2006) 『嘘と貪欲——西欧中世の商業・商人観』名古屋大学出版会。
- 田中生夫 (1966) 『イギリス初期銀行史研究』日本評論社。
- 田中英明 (2012) 「セントラル・バンキング論の再考のために——中世後期以降の決済・信用機構とアムステルダム振替銀行」『彦根論叢』第394号, 190-204頁。
- (2017) 『信用機構の政治経済学——商人的機構の歴史と論理』日本経済評論社。
- 徳永正二郎 (1976) 『為替と信用』新評論。
- (2003) 「近世ヨーロッパにおける二つの『為替地図』——リヨンとアムステルダム: 英ポンド体制に先行するヨーロッパ多角的為替決済システムの歴史的位罫」, 『エコノミクス (九州産業大学)』第8巻第2号, 65-103頁。
- 中谷俊介 (2006) 「アムステルダム銀行の預金と貿易取引 (1610-1683年)」, 『日蘭学会会誌』第31巻第1号, 25-41頁。
- 名城邦夫 (2006) 「中世後期・近世初期西ヨーロッパにおける支払決済システムの成立——計算貨幣による市場統合」, 『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第43巻第1号, 13-85頁。
- (2008) 「中世後期・近世初期西ヨーロッパ・ドイツにおける支払決済システム成立: アムステルダム市立為替銀行の意義」, 『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第45巻第1号, 27-71頁。
- (2011) 「17世紀前半西ヨーロッパにおけるニュルンベルク為替銀行の意義——アムステルダム為替銀行との比較を中心に」, 『名古屋学院大学論集 社会科学篇』, 第48巻第1号, 1-51頁。

金融史研究におけるアムステルダム銀行の位置

- 橋本理博（2013）「アムステルダム銀行におけるマーチャント・バンカーの決済傾向——ホープ商会の事例」『経済科学』第61巻第3号，35-52頁。
- 松岡和人（2003）「17世紀初頭におけるアムステルダム金融市場の発展について」、『社会科学論集』第40・41合併号，233-242頁。
- 宮田美智也（1987）「17・18世紀アムステルダムの金融市場の構造」『金沢大学経済学部論集』第7巻第1号，41-77頁。
- 楊枝嗣朗（1982）『イギリス信用貨幣史研究』九州大学出版会。
——（2004）『近代初期イギリス金融革命—為替手形・多角的決済システム・商人資本—』ミネルヴァ書房。
- 渡辺佐平（1964）「信用制度と信用理論」，遊部久蔵ほか編『資本論講座（5）—利子・信用』青木書店，所収。